

半七捕物帳

津の国屋

岡本綺堂

青空文庫

秋の宵であつた。どこかで題目太鼓の音がきこえる。この場合、月並の鳴物だとは思いつつも、じつと耳をすまして聴いていると、やはり一種のさびしさを誘い出された。

「七偏人が百物語をしたのは、こんな晩でしようね」と、わたしは云い出した。

「そうでしょうよ」と、半七老人は笑っていた。「あれは勿論つくり話ですけど、百物語なんていうものは、昔はほんとうにやつたもんですよ。なにしろ江戸時代には馬鹿に怪談が流行りまし

たからね。芝居にでも草双紙にでも無暗むやみにお化けが出たもんです」

「あなたの御商売の畑にもずいぶん怪談がありましたでしょうね」

「随分ありますが、わたくし共の方の怪談にはどうもほんとうの怪談が少なくなつて、しまいへ行くとだんだんに種の割れるのが多くつて困りますよ。あなたにはまだ津の国屋のお話はしませんでしたつけね」

「いいえ、伺いません。怪談ですか」

「怪談です」と、老人はまじめにうなずいた。「しかもこの赤坂にあつたことなんです。これはわたくしが正面から掛り合つた事件じゃありません。桐畑の常吉という若い奴が働いた仕事で、わたくしはその親父の幸右衛門という男の世話になつたことがあつ

た関係上、蔭へまわって若い者の片棒をかついでやったわけですから、いくらか聞き落しもあるかも知れませんが。なにしろ随分入り組んでいる話で、ちよいと聴くと何だか嘘らしいようですが、まがいなしの実録、そのつもりで聴いて下さい。昔と云っても、たった三四十年前ですけれども、それでも世界がまるで違っていて、今の人には思いも付かないようなことが時々ありました」

赤坂裏うらてんまちよう伝馬町の常磐津の女師匠文字春が堀の内の御祖母様

へ参詣に行つて、くたびれ足を引き摺つて四谷の大木戸まで帰りついたのは、弘化四年六月なかばの夕方であつた。赤坂から堀の内へ通うには別に近道がないでもなかつたが、女一人であるから

なるべく繁華な本街道を選んだのと、真夏の暑い日ざかりを信しがら
樂きの店で少し休んでいたのとで、女の足でようよう江戸へはい
ったのは、もう夕六ツ半（七時）をすぎた頃で、さすがに長いこ
の頃の日もすっかり暮れ切ってしまった。

甲州街道の砂を浴びて、気味のわるい襟元の汗をふきながら、
文字春は四谷の大通りをまつすぐに急いでくる途中で、彼女は自
分のあとに付いてくる十六七の娘を見かえった。

「姐ねえさん。おまえさん何処へ行くの」

この娘は、さつきから文字春のあとになり先になって、影のよ
うに付きまといつて来るのであった。うす暗がりではよくは判らない
が、路傍みちばたの店の灯でちらりと見たところは、色の蒼白い、瘡やせ

形の娘で、髪は島田に結つて、白地に撫なで子しこを染め出した中ちゆうが。
形たの浴衣ゆかたを着ていた。

唯それだけなら別に仔細もないのであるが、彼女はとにかくに文字春のそばを離れないで、あたかも道連れであるかのようにこすり付いて歩いてくる。それがうるさくもあつたが、おそらく若い娘の心寂しいので、ただ何がなしに人のあとを追つて来るのであるろうと思つて、初めは格別に気にも止めなかつたが、あまりしつこく付きまといつて来るので、文字春もしまいには忌いやな心持になつた。なんだか薄気味悪くもなつて来た。

しかし相手は屑かぼそ細い娘である。まさかに物取りや巾きん着ちやく切りきでもあるまい。文字春は今年二十六で、女としては大柄の方であつ

た。万一相手の娘がよくない者で、だしぬけに何かの悪さを仕掛けたとしても、やみやみ彼女に負かされる程のこともあるまいと多寡たかをくくっていたので、文字春はさのみ怖いとも恐ろしいとも思っていないかったのであるが、何分にも自分のあとを付け廻してくるのが気になってならなかった。彼女はだんだんに気味が悪くなって来て、物取りや巾着切りなどということを通り越して、なにか一種の魔物ではないかとも疑いはじめた。死に神か通り魔か、狐か狸か、なにかの妖怪が自分に付きまっわって来るのではないかと思うと、文字春は俄かにぞつとした。彼女はもう強がつてはいられなくなつて、数珠じゆずをかけた手をそつとあわせて、口のうちでお題目を一心に念じながら歩いて来たのであつた。それでも無

事に大木戸を越して、もう江戸へはいったと思うと、彼女は又すこし気が強くなつた。灯ともし頃とはいいなながら、賑やかな真夏のゆうがたで、両側には町屋まちやもある。かれはここまで来た時に、はじめて思い切つてその娘に声をかけたのである。声をかけられて、娘は低い声で遠慮勝ちに答えた。

「はい。赤坂の方へ……」

「赤坂はどこです」

「裏伝馬町というところへ……」

文字春はまたぎよつとした。本来ならば丁度いい道連れともいふべきであるが、この場合に彼女はとてもそんなことを考えてはいられなかつた。彼女はどうして此の娘が自分のゆく先を知つて

いるのであろうと怪しみ恐れた。彼女は左右を見かえりながら又訊いた。

「おまえさんは裏伝馬町のなんという家うちを訪ねて行くの」

「津の国屋という酒屋へ……」

「そうして、おまえさんは何処から来たの」

「八王子の方から」

「そう」

とは云ったが、文字春はいよいよおかしく思った。近いところと云つても、八王子から江戸の赤坂まで辿つて来るのは、この時代では一つの旅である。しかも見たところでは、この娘はなんの旅支度もしていない。笠もなく、手荷物もなく、草鞋わらじすらも穿はい

ていない。彼女は浴衣の裳すそさえも引き揚げないで、麻裏の草履を穿いているらしかった。若い女がこんな悠長らしい姿で八王子から江戸へ来る——それがどうも文字春の腑に落ちなかつた。しかし一旦こうして詞ことばをかけた以上、こつちも逃げ出すわけにもゆかず、先方でもいよいよ付きまどつて離れまいと思つたので、彼女はよんどころなく度胸を据えて、この怪しい道連れの娘と話しながら歩いた。

「津の国屋に誰か知っている人でもあるの」

「はい。逢いにいく人があります」

「なんという人」

「お雪さんという娘こに……」

お雪というのは津の国屋の秘蔵娘で、文字春のところへ常磐津の稽古に来るのであった。怪しい娘が自分の弟子をたずねてゆく——文字春は更に不安の種をました。お雪は今年十七で、町内でも評判の容貌きりようよ好しである。津の国屋は可なりの身代しんだいで、しかも親達が遊芸を好むので師匠にとっては為になる弟子でもあった。文字春は自分の大切な弟子の身の上がなんとなく危ぶまれるので、根掘り葉ほりに詮索をはじめた。

「そのお雪さんを前から識っているの」

「いいえ」と、娘は微かに答えた。

「一度も逢ったことはないの」

「逢ったことはありません。姉さんには逢いましたけれど……」

文字春はなんだか忌な心持になった。お雪の姉のお清は、今から十年前に急病で死んだのである。それにしても此の娘がどうしてそのお清を識っているのかを、彼女は更に詮議しなければならなかった。

「死んだお清さんはお前さんのお友達なの」

娘は黙っていた。

「おまえさんの名は」

娘はやはり俯向うつむいてなんにも云わなかった。こんなことを云っているうちに、あたりはもう夜の景色になって、そこらの店先の涼み台では賑やかな笑い声もきこえた。それでも文字春はなんだかうしろが見られて、どうしてもこの怪しい娘に対する疑いが解

けなかつた。彼女は黙つてあるきながら横眼に覗くと、娘の島田はむごたらしいように崩れかかつて、その後れ毛おくが蒼白い頬の上にふるえていた。文字春は絵にかいた幽霊を思い出して、いよいよ薄気味悪くなつて来た。いくら賑やかな町なかでも、こんな女と連れ立つてあるくのは、どう考えてもいい心持ではなかつた。

四谷の大通りを行き尽すと、どうしても暗い寂しい御堀端を通らなければならぬ。文字春は云い知れない不安に襲われながら、明るい両側の灯をうしろに見て、御堀端を右に切れると、娘はやはり俯向いて彼女について来た。松平佐渡守の屋敷前をゆき過ぎ、間あいの馬場まで来かかった時に、娘のすがたは暗い中にふつと消えてしまった。おどろいて左右を見まわしたが、どこにも見え

ない。呼んでみたが返事もない。文字春はぞつとして惣身が鳥肌になった。彼女はもう前へ進む勇氣はないので、転ころげるように元来た方面へ引つ返して、大通りの明るいところへ逃げて来た。

「おい、師匠。どうした」

声をかけられてよく視ると、それは同町内に住んでいる大工の兼吉であつた。

「あ、棟梁とうりよう」

「どうした。ひどく息を切つて、何かいたずら者にでも出つ食わしたのかえ」

「え。そうじゃないけれど……」と、文字春は息をはずませながら云つた。「おまえさん、町内へ帰るんでしよう」

「そうさ。友達のところへ行つて、将棋をさしていて遅くなつちまつたのさ。師匠は一体どつちの方角へ行くんだ。」

「あたしも家へ帰るの。後ごしょう生だから一緒に行つてくださいな」

兼吉はもう五十ばかりであるが、男でもあり、職人でもあり、こういう時の道連れには屈くつきよう 竟だと思われたので、文字春はほ

つとして一緒にあるきでした。それでも馬場の前を通りぬける時には襟元から水を浴びせられるように身をちぢめながら歩いた。

さつきからの様子がおかしいので、兼吉はなにか仔細があるらしく思つて、暗い堀端を歩きながらだんだん聞き出すと、文字春は声を忍ばせながら一切の事情を話した。

「あたしは最初からなんだか気味が悪くつてしようがなかったん

ですよ。別にこうということもないんですけれど、唯なんだか忌
な心持で……。そうすると、とうとう途中でふいと消えてしま
うんですもの。あたしは夢中で四谷の方へ逃げだして、これからど
うしようかと思つているところへ丁度棟梁が来てくれたので、あ
たしも生きかえつたような心持になつたんですよ」

「そりやあ少し変だ」と、兼吉も暗いなかで声を低めた。「師匠。
その娘は十六七で、島田に結ゆつていたと云つたね」

「そうよ。よく判らなかつたけれど、色の白い、ちよいといい娘こ
のようでしたよ」

「なんで津の国屋へ行くんだらう」

「お雪さんに逢いに行くんだって……。お雪さんには初めて逢う

んだけれど、死んだ姉さんには逢ったことがあるようなことを云つていました」

「むむう。そりやあいけねえ」と、兼吉は溜息をついた。「又来たのか」

文字春は飛び上がって、兼吉の手をしっかりと掴んだ。彼女は唇をふるわせて訊いた。

「じゃあ、棟梁。おまえさん、あの娘を知っているのかえ」

「むむ。可哀そうに、お雪さんも長いことはあるめえ」

文字春はもう声が出なくなつた。かれは兼吉の手に獅^し噛^がみ付いたままで、ふるえながら引き摺られて行つた。

自分の家の前まで無事に送り届けて貰つて、文字春は初めてほんとうに自分の魂を取り戻したような心持になった。彼女は自分を送つて来てくれた礼心に、兼吉を内へ呼び込んで、茶でも一杯のんで行けと勤めた。彼女は小女こおんなと二人暮しであるので、すぐその小女を使に出して、近所へ菓子を買いにやりなどした。兼吉もことわり兼ねてあがり込むと、文字春は団扇うちわをすすめながら云つた。

「ほんとうに今夜はおかげさまで助かりました。信心まいりも的あてにやあならない。あたしは余つぽど罪が深いのかしら。それにし

ても気になつてならないのは……。あの娘が津の国屋へたずねて行くというのは、一体どういう訳なんでしょうね」

彼女は兼吉を無理に呼び込んだのも、実はこの恐ろしそうな秘密を聞き出したいためであつた。兼吉も初めはいい加減ことばに詞ことばを聞き出したが、自分がうっかり口をすべらしてしまつた以上、その詞ことば質を取つて問い詰めるので、彼もとうとう白状しないわけには行かなくなつた。

「出入り場の噂をするようで良くねえが、師匠はおいらから見ると半分も年が違ふんだから、なんにも知らねえ筈だ。その娘こは自分の名をなんとか云つたかえ」

「いいえ。こつちで訊いても黙っているんです。おかしいじゃあ

りませんか」

「むむ。おかしい。その娘の名はお安というんだろうと思う。八王子の方で死んだ筈だ」

文字春はいよいよ身を固くして、ひと膝のり出した。

「そうです、そうですよ。八王子の方から来たと言っていましたよ。じゃあ、あの娘は八王子の方で死んだんですか」

「なんでも井戸へ身を投げて死んだという噂だが、遠いところの事だから確かには判らねえ。身を投げたか首をくくったか、どっちにしても変死には違げえねえんだ」

「まあ」と、文字春は真つ蒼になった。「一体どうして死んだんでしょうね」

「こんなことは津の国屋でも隠しているし、おいら達も知らねえ顔をしているんだが、おめえは今夜その道連れになつて来たというから、まんざら係り合いのねえこともねえから」

「あら、棟梁、忌いやですよ。あたしなんにも係り合いなんぞありやしませんよ」

「まあさ。ともかくも其の娘と一緒に来たんだから、まんざら因縁のねえことはねえ。それだから内ないしよ所でおめえにだけは話して聞かせる。だが、世間には沙汰無しだよ。おいらがこんな事をしやべつたなんていうことが津の国屋へ知れると、出入り場を一軒しくじるような事が出来るかも知れねえから。いいかえ」

文字春は黙つてうなずいた。

「おいらも遠い昔のことはよく知らねえが、親父なんぞの話を知くと、あの津の国屋という家は三代ほど前から江戸へ出て来て、下谷の津の国屋という酒屋に奉公していたんだが、三代前の主人というのはなかなかの辛抱人で、津の国屋の暖簾のれんを分けて貰ってこの町内に店を出したのが始まりで、とんとん拍子に運が向いてきて、本家の津の国屋はとうに潰れてしまったが、こつちはいよいよ繁昌になるばかりで、二代目三代目と続いて来た。ところが、今度の主人夫婦になってから子供が出来ねえ。主人はもう三十を越したもんだから、早く貰い子でもせざあなるめえというので、八王子にいる遠縁のものからお安という娘を貰って、まあ可愛がって育てていたんだ。すると、そのお安が十歳とおになった時に、今

まで子種がねえと諦めていたおかみさんの腹が大きくなつて、女の子が生まれた。それがお清という娘で、貫もらい娘のお安と姉きょうだ妹いのように育てていたが、そうなると人情で生みの子が可愛い、貫い娘が邪魔になる。といつて、世間の手前もあり、貫い娘の親たちへの義理もあり、かたがたどうすることも出来ないので、ゆくゆくはお清に家督を嗣つがせ、貫い娘の方には婿を取つて分家させるというようなことを云つていたんだが、そうなると今度は又金が惜しい。分家させるには相当の金が要いる。こんなことから貫い娘をだんだん邪魔にし始めて……。といつても、世間の眼に立つようなことはしない。うわべは生みの娘と同じように育てているうちに、二番目の娘がまた生まれた。それが今のお雪さんだ。

そうして実子が二人まで出来てみると、貰い娘の方はいよいよ邪魔になるだろうじゃねえか」

「ほんとうにねえ」と、文字春も溜息をついた。「いつそ貰い子が男だと、妻めあわせるということも出来るんだけど、みんな女じやどうにもなりませんわね」

「それだから困る。いつそ其のわけを云つて、貰い娘は八王子の里へ戻してしまつたらよさそうなものだったが、そうもゆかねえ訳があると見えて、その貰い娘のお安ちゃんが十七になつた時に、とうとう追い出してしまつた。勿論、ただ追い出すという訳にやゆかねえ。店へ出入りの屋根屋の職人と情交わけがあるというので、それを廉かどに追い返してしまつたんだ」

「そんなことは嘘なんですか」

「どうも嘘らしい」と、兼吉は首をふった。「その職人は竹と云つて、年も若し、面付きこそ人並だが、酒はのむ、博奕は打つ、どうにもこうにもしようのねえ野郎だ。お安ちゃんはおとなしい娘だ。よりに拵よつてあんな野郎とどうのこうのというわけがねえ。それでも津の国屋ではそれを云い立てにして、着のみ着のまま同様でお安ちゃんを里へ追い返してしまつたんだ。世間にこそ知れねえが、それまでにも内輪うちわでは貰い娘を何か邪慳じゃけんにしたこともあるだろうし、お安という娘もなかなか利巧者だから、親たちの胸のうちも大抵さとつていたらしい。それだから、いよいよ追いつ出される時には大變に口惜くやしがって、自分は貰い子だから実子が

出来た以上、離縁されるのも仕方がない。けれども、ほかの事と違って、そんな淫いたずら奔をしたという濡衣ぬれぎぬをきせて追い出すというのはあんまりだ。里へ帰って親兄弟や親類にも顔向けが出来ない。きつとこの恨みは晴らしてやるというようなことを、仲のいい老婢ばあやに泣いて話したそうだ」

「まあ、可哀そうだわねえ」と、文字春も眼をうるませた。「それからどうしたの」

「それから八王子へ帰って、間もなく死んでしまったという噂だ。今もいう通り、身を投げたか首をくくったか知らねえが、なにしろ津の国屋を恨んで死んだに相違ねえ。娘はまあそれとして、その相手と決められた屋根屋の竹の野郎がおとなしく黙っているの

がおかしいと思つていると、それからふた月ばかり経たねえうちに、ちようど夏の炎天に出入り場の高い屋根へあがつて仕事をしている時、どうしたはずみか真つ逆さまにころげ落ちて、頭をぶち割つてそれぎりよ。そうなると世間では又いろいろのことを云つて、竹の野郎は津の国屋から幾らか貰つて、得心とくしんずくで黙つていたに相違ねえ。あいつが変死をしたのは娘のおもいだと、まあこつういうんだ」

「怖いわねえ。悪いことは出来ないわねえ」と、文字春は今更のように溜息をついた。

「どつちにしてもお安という娘は死ぬ、その相手だという竹の野郎もつづいて死ぬ。それでまあ市いちが栄えたいという訳なんだが、ここ

に一つ不思議なことは、忘れもしねえ今から丁度十年前……。これは師匠も知っているだろうが、津の国屋の実子のお清さんがぶらぶら病いで死んでしまった。そりやあ老^{ろうし}少^{しょう}不定^{ふじょう}で寿命^{じゆうめい}ずくなら仕方ねえわけだが、その死んだのが丁度十七の年で、先^{せん}のお安という娘と同じ年だ。お安も十七で死んだ。お清も十七で死んだ。こうなるとちつとおかしい。表向きには誰もなんとも云わねえが、先の貰い娘の一件を知っているものは、蔭でいろいろのことを云っている。それにもう一つおかしいのは、あのお清さんの死ぬ前にちようど今夜のようなことがあつたんだ」

「棟梁」

「いや、おどかす訳じゃあねえ」と、兼吉はわざと笑ってみせた。

「実はね、津の国屋の惣領娘がわずらいつく二、三日まえの晩に、近所の者が外へ出ると、町内の角で一人の娘に逢った。娘は撫なでし子の模様の浴衣ゆかたを着て……」

「もう止してください。わかりましたよ」と、文字春はもう身動きが出来なくなったらしく、片手を畳に突いたまままで眼を据えていた。

「いや、もうちつとだ。その娘がどうしても津の国屋の貰い娘のお安ちゃんに相違ねえので、思わず声をかけようとする、娘の姿は消えてしまったという話だ。おいらもその話をかねて聞いていたが、なにを云うのかと思つて碌に気にも留めずにいたが、今夜の師匠の話の聴いてみると、成程それも嘘じゃなかったらしい。

そのお安ちゃんが又お迎いにやって来たんだ。津の国屋のお雪ちゃんは今十七になったからね」

台所でかたりという音がきこえたので、文字春はまたぎよつとした。菓子を買に行つた小女が今ようやく帰つて来たのであつた。

三

文字春はその晩おちおち眠られなかつた。撫子の浴衣を着た若い女が蚊帳かやの外から覗いているような夢におそわれて、少しうとうとするかと思うとすぐに眼がさめた。あいにくに蒸し暑い夜で、

彼女の枕紙はびっしり濡れてしまった。あくる朝も頭が重くて胸がつかえて、あさ飯の膳にむかう気にもなれなかつた。きのうとおみち遠路を歩いたので暑さにあたってたのかも知れないと、小女の手前は誤魔かしていたが、彼女の頭のなかは云い知れない恐怖に埋められていた。仏壇には線香を供えて、彼女はよそながらお安という娘の回向えしやうをしていた。

近所の娘たちはいつもの通りに稽古に來た。津の国屋のお雪も來た。お雪の無事な顔をみて、文字春はまずほっと安心したが、そのうしろには眼にみえないお安の影が付きまどっているのではないかと思うと、彼女はお雪と向い合うのがなんだか薄気味悪かつた。稽古が済むと、お雪はこんなことを云い出した。

「お師匠しよさん、ゆうべは変なことがあつたんですよ」

文字春は胸をおどらせた。

「かれこれ五ツ半（午後九時）頃でしたらう」と、お雪は話した。「あたしが店の前の縁台に腰をかけて涼んでいると、白地の浴衣を着た……丁度あたしと同じ年くらいの娘が家の前に立つて、なんだか仔細ありそうに家の中をいつまでも覗いているんです。どうもおかしな人だと思つていると、店の長太郎も気がついて、なにか御用ですかと声をかけると、その娘は黙つてすうと行つてしまつたんです。それから少し経つと、知らない駕籠屋が来て駕籠賃をくれと云いますから、それは間違いだろう、ここの家で駕籠なんかに乗つた者はないと云うと、いいえ、四谷見附のそばから

娘さんに乗せて来ました。その娘さんは町内の角で降りて、駕籠賃は津の国屋へ行つて貰つてくれと云つたから、それでここへ受け取りに来たんだと云つて、どうしても肯きかないんです」

「それから、どうして……」

「それでも、こつちじや全く覚えがないんですもの」と、お雪は不平らしく云つた。「番頭も帳場から出て来て、一体その娘はどんな女だと訊くと、年ごろは十七八で撫子の模様の浴衣を着ていたと云うんです。してみると、たつた今この店を覗いていた娘に相違ない。そんないい加減なことを云つて、駕籠賃を踏み倒して逃げたんだらうと云つていると、奥からお父さつさんが出て来て、たとい嘘にもしろ、津の国屋の暖簾を指さされたのがこつち不祥だ。

駕籠屋さんに損をさせては気の毒だと云つて、むこうの云う通りに駕籠賃を払つてやつたら、駕籠屋も喜んで帰りました。お父っさんはそれぎりで奥へはいつてしまつて、別になんにも云いませんでしたけれど、あとで店の者たちは、ほんとうに今どきの娘は油断がならない。あんな生なまわか若い癖に駕籠賃を踏み倒したりなんかして、あれがだんだん増長すると騙かたりや美人局つつもたせでもやり兼ねないと……」

「そりや全くですわね」

なにげなく相あいづち槌を打つていたが、文字春はもう正面からお雪の顔を見ていられなくなつた。騙りや美人局どころの話ではない。かの娘の正体がもつともつと恐ろしいものであることを、お雪は

勿論、店の者たちも知らないのである。そのなかで主人一人がな
んにも云わずに素直に駕籠賃を払ってやったのは、さすがに胸の
奥底に思いあたることがあるからであろう。お安の魂は、御堀端
で自分に別れてから、さらに駕籠屋に送られて津の国屋まで乗り
込んで来たのである。なんにも知らないで其の話をしているお雪
のうしろには、きつと撫子の浴衣の影が煙けむのように付きまつわつ
ているに極まった。それを思うと、文字春は恐ろしくもあり、ま
た可哀そうでもあった。

慾得なしみずくばかりでなく、かれは弟子師匠の人情から考えても、
久しい馴染なしみの美しい弟子がやがて死しり霊りょうに憑とり殺されるのかと思
うと、あまりの痛ましさに堪えなかった。さりとしてほかの事とは

違つて、迂濶うかつに注意することもできない。それが親達の耳にはい
つて、師匠はとんでもないことを云うと掛け合い込まれた時には、
表向きにはなんとも云い訳ができない。もう一つには、そんなこ
とをうっかりお雪に注意して、自分が死霊の恨みをうけては大変
である。それやこれやを考えると、文字春はこのまま口を閉じて
お雪を見殺しにするよりほかはなかつた。

重ねがさね忌な話ばかり聞かされるのと、ゆうべ碌々に眠らな
かつた疲れとで、文字春はいよいよ気分が悪くなつて、午ひるからは
稽古を休んでしまった。そうして、仏壇に燈明を絶やさないう
にして、ゆうべ道連れになつたお安の成じょうぶつ 仏ぶつを祈り、あわせて
お雪と自分との無事息災を日頃信心する御祖師様に祈りつづけて

いた。その晩も彼女はやはりおちおち眠られなかつた。

あくる日も朝から暑かつた。お雪は相変らず稽古に來たので、文字春はまず安心した。こうして二日も三日も無事につづいたので、彼女が恐怖の念も少し薄らいできて、夜もはじめて眠られるようになった。しかし撫子の浴衣を着たお安の亡霊がたしかに自分と道連れになつて來たことを考えると、まだ滅多に油断はできないと危ぶんでいると、それから五日目になつて、お雪は稽古に來た時にこんなことを又話した。

「阿母^{おつか}さんがきのうの夕方、飛んでもない怪我をしましたの」

「どうしたんです」と、文字春は又ひやりとした。

「きのうの夕方もう六ツ過ぎでしたらう。阿母さんが二階へなに

か取りに行くとき、階子はしごのうえから二段目のところで足を踏みはずして、まっさかさまに転げ落ちて……。それでもいい塩梅に頭を撲ぶたなかつたんですけれど、左の足を少し挫くじいたようでお医者にかかってゆうべから寝ているんです」

「足を挫いたのですか」

「お医者様はひどく挫いたんじゃないと云いますけれど、なんだか骨がずきずき痛むと云って、けさもやっぱり横になつていて、いつもは女中をやるんですけれど、ゆうべに限そとって自分が二階へあがつて行って、どうしたはずみか、そんな粗相そそをしてしまつたんです」

「そりゃほんとうに飛んだ御災難でしたね。いずれお見舞にうか

がいますから、どうぞ宜しく」

お安の祟りたたりがだんだん事実となつて現われて来るらしいので、文字春は身もすくむようにおびやかされた。気のせいか、お雪の顔色も少し蒼ざめて、帰つてゆくうしろ姿も影が薄いように思われた。何にしてもそれを聞いた以上、彼女は知らない顔をして、るわけにもゆかないので、進まないながらも其の日の午すぎに、近所で買った最中もなかの折おりを持って、津の国屋へ見舞に行つた。津の国屋の女房お藤はやはり横になつていたが、けさにくらべると足の痛みは余ほど薄らいだとのことであつた。

「お稽古でお忙がしい処をわざわざありがとうございます。どうも思いもよらない災難で飛んだ目に逢いました」と、お藤は眉

をしかめながら云った。「なに、二階の物干へ洗濯物を取込みに上がったんです。いつも女中がするんですけれど、その女中が怪我をしましてね。井戸端で水を汲んでいるうちに、手桶をさげたまますべって転んで、これも膝っ小僧を擦り剥いたと云って跛足びっこを引いているもんですから、わたしが代りに二階へあがると又この始末です。女の跛足が二人も出来てしまつて、ほんとうに困ります」

それからそれへと死しりょう霊の祟りがひろがってくるらしいので、文字春はいよいよ恐ろしくなつた。こんなところにとても長居はできないので、かれは早々に挨拶をして逃げ出して来た。明るい往来に出て、初めてほつとしながら見かえると、津の国屋の大屋

根に大きな鴉からすが一匹じつとして止まっていた。それが又なんだか仔細ありそうにも思われたので、文字春はいよいよ急いで帰つて来た。そのうしろ姿を見送つて、鴉は一と声高く鳴いた。

津の国屋の女房はその後十日とおかほど寝ていたが、まだ自由に歩くことが出来なかつた。そのうちに文字春は又こんな忌な話を聞かされた。津の国屋の店の若い者が、近所の武家屋敷へ御用聞きにゆくと、その屋根瓦の一枚が突然その上に落ちて来て、彼は右の眉のあたりを強く打たれて、片目がまったく腫はれふさがつてしまった。その若い者は長太郎といつて、このあいだの晩、自分の店先で撫子の浴衣を着た娘に声をかけた男であることを、文字春はお雪の話で知つた。おそろしい祟りはそれからそれへと手をひ

ろげて、津の国屋の一家眷属いっかけんぞくにわざわいするのではあるまいか。津の国屋ばかりでなく、しまいには自分の身のうえにまで振りかかって来るのではあるまいかと恐れられて、文字春は実に生きている空もなかった。

かれは程近い円通寺のお祖師様へ日参にっさんをはじめた。

四

津の国屋の女房お藤の怪我はどうもはかばかしく癒らなかつた。何分にも足の痛みどころであるから、それを悪くこじらせて打ち身うまみちのようになっても困るといふ心配から、そのころ浅草の馬道

に有名な接骨^{ほねつぎ}の医者があるというので、赤坂から馬道まで駕籠に乗って毎日通うことにした。

七月の初め、むかしの暦でいえばもう秋であるが、残暑はなかなか強いのと、その医者は非常に繁昌で、少し遅く行くといつまでも玄関に待たされるおそれがあるので、お藤は努めて朝涼^{あさすず}のうち^{うち}に家を出ることにしていた。けさも明け六ツ（午前六時）を少しすぎた頃に津の国屋の店を出て、お藤は待たせてある駕籠に乗る時にふと見ると、一人の僧が自分の家にむかつて何か頻りに念じているらしかった。この間じゆうからいろいろの禍いがつづいている矢先であるので、お藤はなんとなく気にかかつて、そのまま見過ごしてゆくことが出来なくなった。かれは立ち停まっ

て、じつとその僧の立ち姿を見つめていると、彼女を送って出た小僧の勇吉も、黙って不思議そうに眺めていた。

僧は四十前後で、まず普通の托鉢僧という姿であった。托鉢の僧が店のさき立つ——それは別にめずらしいことでもなかったが、ここらでかつて見馴れない出家であるのと、気のせいかわかりませんが、何となく普通とは変って見えるので、お藤は駕籠によりかかったままでしばらく眺めていると、僧はやがて店の前を立ち去って、お藤の駕籠のそばを通りすぎる時に、口のうちでつぶやくように云うのが聞えた。

「凶宅じゃ。南無阿弥陀仏、なむあみだぶつ」

「あ、もし」と、お藤は思わず彼をよび止めた。「御出家様にち

よいと伺いますが、何かこの家に悪いことでもございますか」

「死霊の祟りがある。お気の毒じやが、この家は絶えるかも知れぬ」

こう云い捨てて彼は飄ひようぜん然と立ち去った。お藤は蒼くなつて跛足をひきながら内へころげ込んで、夫の次郎兵衛にそれを訴えると、次郎兵衛も一旦は眉を寄せたが又思い直したように笑い出した。

「坊主なんぞは兎角そんなことを云いたがるものだ。ここの家に怪我人がつづいたということは何処からか聞き込んで来て、こつちの弱味に付け込んでなにか嚇おどかして祈祷料でもせしめようとす

るのだ。今どきそんな古い手を食つてたまるものか。きつと見ろ。

あした又やって来て同じようなことを云うから」

「そうですかねえ」

夫の云うことにも成程とうなずかれる節があるので、お藤は半信半疑でそのままに駕籠に乗った。しかも其の僧の姿が眼先にちら付いて、彼女は浅草へゆく途中も頻りにその真偽を疑っていたが、往きにも復りにも別かえに変った出来事もなかった。あくる朝、かの僧は津の国屋の店先に姿を見せなかった。そうになると、一種の不安がお藤の胸にまた湧いて来た。かの僧が果たして人を嚇して何分かあの祈祷料をせしめる料簡であるならば、嚇したままで姿を見せない筈はあるまい。彼が再びこの店先に立たないのを見ると、やはりそれは真実の予言で、彼は夫がひと口に貶けなしてしまっ

たような商売ずくの卑しい売僧まいすではないと思われた。店の者にも注意して店先を毎日窺わせたが、かの僧はそれぎり一度も姿をあらわさなかつた。

勿論、店の者どもにも固く口止めをして置いたのであるが、小僧の巳之助が町内の湯屋でうっかりそれをしやべつたので、その噂はすぐに近所にひろまつた。文字春の耳にもはいつた。さなきだに此の間からおびえている彼女は、その噂を聞いていよいよ恐ろしくなつた。彼女は往来で大工の兼吉に逢つたときにささやいた。

「ねえ、棟梁。どうかしようなはないもんでしようかね。お安さんの崇りで、津の国屋さんは今に潰つぶれるかも知れませんかよ」

「どうも困ったもんだ」

出入り場の禍いをむなしく眺めているのは、いかにも不人情のようではあるが、問題が問題であるだけに、差し当りどうすることも出来ない、兼吉も顔をしかめながら云った。彼は文字春にむかつて、いつそお前が津の国屋へ行つて、お安の幽霊と道連れになつたことを正直に話したらどうだと勧めたが、文字春は身ぶるいをして頭かぶりをふつた。そんなことを迂濶に口走つて、自分がどんな祟りを受けるかも知れないと、彼女はひたすら恐れていた。

こんなわけで、文字春は津の国屋の運命を危ぶむばかりでなく、自分の身の上までが不安でならなかつた。彼女は毎日稽古に通つてくるお雪を見るのさえ薄気味悪くて、いつも其のうしろにはお

安の亡霊が影のように付きまとっているのではないかと恐れられてならなかった。そのうちにこんな噂が又もや町内の女湯から伝わった。

津の国屋の女中でお松という、ことし二十歳はたちの女が、夜の四ツ（十時）少し前に湯屋から帰つてくると、薄暗い横町から若い女がまぼろしのように現われて、すれ違いながらお松に声をかけた。「早く暇をお取んなさいよ。津の国屋は潰れるから」

びつくりして見返ると、その女の姿はもう見えなかった。お松は急に怖くなつて息を切つて逃げて帰った。主人にむかつて真逆まぎさかにそんなことを打ち明けるわけにも行かないので、彼女は朋輩のお米よねにそつと話すと、お米は又それを店の者どもに洩らした。店

の者ばかりでなく、女湯へ行つてもお米はそれを近所の人達に話した。それがまた町内の噂の種になった。

いつの代にも、すべてのことが尾鱈おひれを添えて云い触らされるのが世間の習いである。まして迷信の強いこの時代の人たちは、こうした忌な噂がたびたび続くのを決して聞き流している者はなかった。噂はそれからそれへと伝えられて、津の国屋には死霊の祟りがあるということが、単に湯屋髪結床かみゆいどこの噂話ばかりでなく、堅気かたぎの商人あきんどの店先でもまじめにささやかれるようになって来た。あしたあしたが草市くさいちという日に、お雪はいつものように文字春のところへ稽古に来た。丁度ほかに相弟子の不见のを見て、彼女は師匠に小声で話した。

「お師匠しよさん。おまえさんもお聞きでしょう。あたしの家には死霊の祟りがあるとかいう噂を……」

文字春はなんと返事をしていいか、少しゆき詰まったが、どうも正直なことを云いにくいので、彼女はわざと空とぼけていた。

「へえ。そんなことを誰か云うものがあるんですか。まあ、けしからない。どういうわけでしょうかねえ」

「方々でそんなことを云うもんですから、お父おっかっさんや阿母おつかさんももう知っているんです。阿母さんは忌な顔をして、あたしの足の足ももう癒らないかも知れないと云っているんですよ」

「なぜでしょうね」と、文字春は胸をどきつかせながら訊いた。

「なぜだか知りませんが」と、お雪も顔を曇らせていた。

「お父っさんや阿母さんも其の噂をひどく気に病んで、丁度お盆前にそんな噂をされると何だか心持がよくなないと云っているんですの。誰が云い出したんだか知りませんが、まったく気になりますわ。津の国屋の前には女の幽霊が毎晩立っているなんて、飛んでもないことを云われると、嘘だと思つても気味が悪うござんす」

文字春はお雪が可哀そうでならなかつた。お雪はなんにも知らないに相違ない。知らなければこそ平気でそんなことを云つているのであろう。むしろ正直に何もかも打ち明けて、なんとか用心するようになつて注意してやりたいとは思つたが、どうも思い切つてそれを云い出すほどの勇氣がなかつた。かれはいい加減の返事をし

て其の場を済ませてしまった。

盆休みが過ぎてから、お雪は師匠のところへ来て又こんなことを云った。

「お師匠さん。家のお父^{うち}つさんは隠居して坊主となると云い出したのを、阿母さんや番頭が止めたんで、まあ思い止まることになつたんですよ」

「坊主に……」と、文字春もおどろいた。「旦那が坊主になるなんて、一体どうなすつたんでしようねえ」

十二日の朝、菩提寺の住職が津の国屋へ来た。棚^{たなぎょう}経^{きやう}を読ん

でしまつてから、彼は近ごろ御親類中に御不幸でもござつたかと訊いた。この矢先に突然そんなことを訊かれて、津の国屋の夫婦

もぞつとした。併しなんにも心当りはないと答えると、住職は首をかしげて黙っていた。その素振りがなんとなく仔細ありそうにも見えたので、夫婦はだんだん問いつめると、この頃三夜ほど続いて、津の国屋の墓のまえに若い女の姿が煙けむのように立っているのを、住職はたしかに見とどけたというのであつた。着物の色模様ははつきりとは判らなかつたが、白地に撫子を染め出してあつたように見えたと、住職はさらに説明した。

それでもやはり心あたりはないと云い切つて、夫婦は相当の御経料を贈つて、住職を帰してやったが、その夕方からお藤の足はまた強く痛み出した。次郎兵衛も気分が悪いと云つて宵から寝てしまつた。夜なかに夫婦が交る交るに唸り出したので、家うちじゆう

の者がおどろいて起きた。お藤の痛みは翌日幸いに薄らいだが、次郎兵衛はやはり気分が悪いと云つて、飯も碌々に食わないで半日は寝たり起きたりしていたが、午すぎから寺まいりに出て行つた。しかしその晩、迎え火を焚く時に、主人だけは門かどぐち口へ顔を出さなかつた。

十五の送り火を焚いてしまつてから、次郎兵衛は女房と番頭とを奥の間へ呼んで、自分はもう隠居すると突然云い出した。女房は勿論おどろいたが、番頭の金兵衛もびっくりして、主人にその仔細を聞き糺したが、次郎兵衛はくわしい説明をあたえなかつた。しかしそれが十三日の午すぎに寺まいりに行つて、住職となにか相談の結果であるらしいことは想像された。主人が突然の隠居に

対して、金兵衛はあくまでも反対であつた。女房のお藤もやはり不同意で、たとい隠居するにしても、娘に相当の婿をとつて初ういま孫ごの顔でも見た上でなければならぬと主張した。その押し問答のあいだに、次郎兵衛は単に隠居するばかりでなく、隠居と同時に家しゅつけする決心であることが判つたので、女房も番頭も又おどろいた。二人は涙を流して一いつとき晌ああまりも意見して、どうにかこうにか主人の決心をにぶらせた。

「お父っさんがああ云うのも無理はないけれど、今だしぬけにそんなことをされちやあ、この津の国屋の店もどうなるか判らないからねえ」と、お藤はあく朝、むすめのお雪にそつと話した。

この話をきかされて、文字春は肚はらのなかでうなずいた。津の国

屋の主人が隠居して頭を刈り丸めようとする仔細も大抵さとられた。おそらく菩提寺の住職に因果を説かれて、お安の死霊の恨みを解くために、俄かに発^{ほっしん}心して出家を思い立ったのであろう。女房や番頭がそれに反対したのも無理はないが、見す見す死霊に付きまとわれて津の国屋の店をかたむけるよりも、お雪に然るべき婿を取って自分は隠居してしまつた方が、むしろ安全ではあるまいかとも思われた。しかし、そんなことを滅多^{めった}に口にすべきものではないので、彼女は黙ってお雪の話聴いていた。

五

それから五、六日経つと、津の国屋の女中のお米よねがまたおどさ
れた。それはやはりかのお松が怪しい女に出逢つたのと同じ刻限
で、かれも町内の湯屋から帰る途中であつた。その晩は雨がしと
しと降つていたので、お米は番傘をかたむけて急いでくると、途
中で足駄あしだを踏みかえして鼻緒をふつつりと切つてしまった。何分
にも薄暗い路ばたでどうすることも出来ないので、かれは鼻緒の
切れた足駄をさげて片足は跣足はだしであるき出そうとすると、傘のか
げから若い女の白い顔が浮き出して、低い声で云つた。

「津の国屋は今に潰つぶれるよ」

お松の話の聴いているので、お米は急に怖くなつた。かれは思
わずきやつと叫んで、持つていた足駄をほうり出して、片足の足

駄も脱いでしまつて、跣足で自分の店へ逃げて歸つたが、年のわ
かいかれは店へかけ込むと同時にぼつたり倒れて氣を失つた。水
や薬の騒ぎでようように息を吹きかえしたが、お米はその夜なか
から大熱を発して、取り留めもないうわごと讒言を口走るようになった。
「津の国屋は今に潰れるよ」

かれは時々こんなことも云つた。主人夫婦は勿論、店の者共
も氣味を悪がつて、病人のお米を宿へ下げてしまった。その駕籠
の出るのをみて、近所の者はまたいろいろの噂を立てた。こんな
ことが長く続いていれば、店は次第にさびれるに決まつているの
で、番頭の金兵衛もひどく心配していたが、幸いにお藤の足の痛
みはだんだんに薄らいで、もう此の頃では馬道へ通わないでも済

むようになつた。次郎兵衛は店の商売などはどうでもいいというようなふうで、毎日かならず朝と晩とには仏壇の前に座つて念仏を唱えていた。

それらの事はお雪の口からみな文字春の耳にはいるので、彼女はいよいよ暗い心持になつて、津の国屋は遅かれ早かれどうしても潰れるのではあるまいかと危ぶまれた。

八月になつて、津の国屋にもしばらく變つたこともなかつたが、十二日の宵に奥の間の仏壇から火が出て、代々の位牌も過去帳も残らず焼けてしまった。宵の口のことであるから、大勢がすぐに消し止めて幸いに大事にはならなかつたが、場所もあろうに仏壇から火が出たということが家内の人々を又おびやかした。

「お燈明の火が風にあおられたのです」と、番頭の金兵衛は云つた。

この矢先に又こんなことが世間に聞えてはよくないと、金兵衛は努めてそれを秘^{かく}して置こうとしたが、誰がしやべるのか近所ではすぐに知ってしまった。女中のお松ももう居たたまれなくなつたと見えて、その月の末に親が病氣だというのを口実にして、無理に暇を取つて行つた。先月にはお米が宿へ下がつて、今月はお松が立ち去り、出代り時でもないのに女中がみな居なくなつてしまつたので、津の国屋では台所働きをする者に差し支えた。近所の桂^{けいあん}庵でも忌な噂を知つていたので、容易に代りの奉公人をよこさなかつた。

「この頃は阿母^{おつか}さんとあたしが台所で働くんですよ」と、お雪は文字春に話した。「それでも阿母さんはまだほんとうに足が良くないんですから、あたしが成るだけ働くようにしています。今だからよござんすけれど、だんだん寒くなると困りますわ」

そういうわけであるから当分は稽古にも来られまいとお雪はおれた。稽古はともかくも、今まで大きな店で育っているお雪が毎日の水仕事は定めて辛かろうと、文字春も涙ぐまれるような心持で、不運な若い娘の顔を眺めていると、お雪はまた云った。

「お父っさんは隠居するのも、坊さんになるのも、まあ一旦は思い止まったんですけれど、この頃になって又どうしても家には居られないと云い出して、ともかくも広徳寺前のお寺へ当分行って

いることになったんです。阿母さんや番頭が今度もいろいろに止めたんですけれど、お父っさんはどうしても肯きかないんだから仕方ありません」

「坊さんになるんじゃないんでしょう」

「坊さんになる訳じゃないんですけれど、なにしろ当分はお寺の御厄介になつていて、ほかの坊さん達が暇な時には、御経を教え、貰うことになるんですつて。なんと云つても肯かないんだから、阿母さんももうあきらめていようです」

「でも、当分はお寺へ行つていて、気が少し落ち着いたら却つていいかも知れませんか」と、文字春は慰めるように云つた。「その方がお家の為かも知れませんか。そうになると、あとは阿母さん

と番頭さんとで御商売の方をやって行くことになるんですね。それでも番頭さんが帳場に坐っていないなされば大丈夫ですわ」

「ほんとうに金兵衛がいなかったら、家は闇です。あとは若い者ばかりですから」

番頭の金兵衛は十一の年から津の国屋へ奉公に来て、二十五年間も無事に勤め通して今年三十五になるが、まだひとりみ独身で実直に

帳場を預かっている。ほかには源蔵、長太郎、重四郎という若い者と、勇吉、巳之助、利七という小僧がいる。それに主人夫婦とお雪と、都合十人暮しの家内に対して、女中二人では今迄でも少し無理であつたところへ、その女中がみな立ち去つてしまつては、これだけの人間に三度の飯を食わせるだけでも容易でない。その

苦勞を思いやると、文字春はいよいよお雪を可哀そうに思ったが、まさかに手伝いに行つてやるわけにもゆかないので、これからだんだんに寒空にむかつて、お雪の白い柔らかい手先に痛ましいひびの切れるのをむなしく眺めているよりほかはなかつた。

「それでも小僧さんが少しは手伝つてくれるでしょう」

「ええ。勇吉だけはよく働いてくれます」と、お雪は云つた。

「ほかの小僧はなんにも役に立ちません。暇さえあれば表へ出て、犬にからかったりなんかしているばかりで……」

「なるほど勇どんはよく働くようですね」

勇吉は金兵衛の遠縁の者で、やはり十一の年から奉公に来て、まだ六年にしかならないが、年の割にはからだも大きく人間も素す

捷ばやい方で、店の仕事の合い間には奥の用にも身を入れて働く。若い者のうちでは長太郎がよく働く。彼は十九で、さきに屋根瓦が落ちて傷つけられた時にも、頭と顔を白布で巻いて、その日からいつもの通りに働いていたのを、文字春も知っていた。

それから二日の後に、津の国屋の主人は下谷広徳寺前の菩提寺へ引き移った。主人は寺のひと間を借りて当分はそこに引き籠っているのであると、津の国屋では世間に披露していたが、近所では又いろいろの噂をたてて、津の国屋の主人はどうとう坊主になったとか、少し気が触れたとか、思い思いの想像説を伝えていた。九月も十日をすぎで、朝晩はもう薄ら寒くなって来た。文字春は午ひるまえ前の稽古をすませて、午ひるまえから神明の祭りに参詣しようと思

つて、着物などを着かえていると、台所の口で案内を求める声
きこえた。小女が出てみると、もう五十近い女が小腰をかがめて
えしやく
会釈した。

「あの、お師匠しよさんはお家うちでしようか」

狭い家でその声はすぐにこつちへも聞えたので、文字春はあわ
てて帯をむすびながら出た。

「おまえさんがお師匠しよさんでございませうか」と、女は改めて会釈
した。「だしぬけにこんなことを願ひに出ますのも何でございま
すが、お師匠しよさんはあの津の国屋さんとお心安くしておいでなさ
るそうでございませうね」

「はあ、津の国屋さんとは御懇意にしています」

「うけたまわりますと、あの店では女中さんが無くって困つてい
るとか申すことですが……。わたくしは青山に居ります者で、ど
こへか御奉公に出たいと存じて居りますところへ、そんなお噂を
うかがいましたもんですから、わたくしのような者で宜しければ、
その津の国屋さんで使つて頂きたいと存じまして……。けれども、
桂庵の手にかかるのは忌いやでございますし、津の国屋さんへだしぬ
けに出ますのも何だか変でございますから、まことに御無理を願
つて相済みませんが、どうかお師匠さんのお口添えを願いたいと
存じまして……」

「ああ、そうですか」

文字春も少しかんがえた。だんだんに寒空にむかつて、津の国

屋で奉公人に困っているのは判り切っている。年は少し老とつて
るし、あまり丈夫そうにも見えないが、この女一人が住み付いて
くれば津の国屋でもどのくらい助かるかもしれない。お雪も水
仕事をしないで済むかも知れない。まことにいい都合であると思
つたが、なにをいうにも相手は初対面の女である。身許みもとも気心も
まるで知れないものを迂濶に引き合わせる訳には行かないと、彼
女はしばらくその返答に躊躇していると、女もそれを察したらし
く、気の毒そうに云った。

「だしぬけに生ましてこんなことを申すのですから、定めて胡乱うろん
な奴とおぼしめすかも知れませんが、いよいよお使いくださると
決まりますれば、身許もくわしく申し上げます。決しておまえさ

んに御迷惑はかけませんから」

「じゃあ、少しここに待っていてください。ともかくも向うへ行つて訊いて来ますから」

出先でちようど着物を着かえているのを幸いに、文字春はすぐに津の国屋へ駈けて行つた。女房に逢つてその話をする、津の国屋では困り切つている最中であるので、すぐにその奉公人を連れて来てくれと云つた。

「お師匠さんのおかげで助かります」と、お雪もしきりに礼を云つた。

文字春は皆から礼を云われて、善いことをしたと喜びながら家へ歸つて、すぐにその女を津の国屋へ連れて行つた。女はお角とかく

いつて、年が年だけに応待も行儀もひと通り心得ているらしいので、津の国屋では故障なしに雇い入れることに決めた。

六

三日の目見得めみえもどこおりなく済んで、お角は津の国屋へいよいよ住み込むことになった。お雪は菓子折を持って文字春のところへ礼に来た。新参ながらお角はひどく女房の気に入っていると、いう話を聞いて、文字春もまず安心した。

お角も礼に来た。それが縁になって、お角は使に出たついでなどに文字春のところへ顔を出した。そうして、やがて一と月ほど

も無事にすぎた時に、お角はいつものように訪ねて来て、文字春となにかの話の末にこんなことをささやいた。

「お師匠さんにもいろいろ御厄介になつたんですが、わたくしは津の国屋に長く辛抱できればいいがと思つていますが……」

「でも、大變におかみさんの氣に入つていふというじゃありませんか」と、文字春は不思議そうに訊いた。

「全くおかみさんは目にかけて下さいますし、お雪さんも善い人ですから、なにも不足はないのでございますが……」

云いかけて彼女は口をつぐんだ。それを押し詰めて詮議すると、津の国屋の女房お藤は番頭の金兵衛と不義を働いていふというのであった。金兵衛は男盛りのひとりもの独身者であるが、お藤はもう五十

を越えている。まさかにそんな不埒ふちちを働く筈はあるまいと、文字春も初めは容易に信用しなかったが、お角はその怪しい形跡をたびたび認めたとするのである。土蔵の奥や二階のひと間へ不義者がそつと連れ立ってゆくのを、自分はたしかに見とどけたと彼女は云った。

「併しそんなことがいつまでも知れずには居りますまい」と、お角は溜息をついた。「もし何かの面倒が起りました時に、わたくしが手引きでも致したように思われましては大変でございます」

主人の女房と家来とが密通の手引きをした者は、その時代の法としては死罪である。お角が津の国屋に奉公をしているのを恐れるのも無理はなかった。お角は暇をとれば、それで済むが、済ま

ないのは女房と番頭との問題で、万一それが本当であるとすれば、津の国屋が潰れるような大騒動がしゅつたい出たい来たいするに相違ない。死霊の祟りよりもこの祟りの方がてきめん覲めん面に怖く思われて、文字春はまた蒼くなつた。

しかし彼女はまだ一途いちぢずにお角の話を信用することも出来ないの
で、そんなことを迂濶に口外してはならぬと、くれぐれもお角に
口止めをして歸した。

よもやとは思いながら、文字春も幾らかの疑いを懐かないわけ
には行かなかつた。お雪は父が自分から進んで菩提寺へ出て行つ
たように話していたが、あるいは女房と番頭とがな狎れ合いでうま
く勧めて追い出したのではあるまいかとも疑われた。年も五十を

越して、ふだんは物堅いように見えていた女房に、そんな恐ろしい魔が魅さすというのも、やはり死霊の祟りではあるまいかと恐れられた。

お安という女の執念はいろいろの祟りをなして、結局、津の国屋をほろぼすのではあるまいかとも思われた。併しこればかりは、文字春は誰に話すことも出来なかった。お雪にかまをかけて聞き出すことも出来なかった。

「いくら願っても、お暇をくださらないので困ります」

お角はその後にも来て文字春に話した。この間からお暇を願っているが、おかみさんがどうしても肯いてくれない。お給金が不足ならば望み通りにやる。年の暮には着物も買ってやる。こつち

では十分に眼をかけてやるから、せめて来年の暖くなるまで辛抱してくれと云われるので、こつちもさすがにそれを振り切つて出ることも出来ないので困っていると、お角はしきりに愚痴をこぼしていた。かれが暇を願っているのは事実であるらしく、お雪も文字春のところへ来てそんなことを話した。お角はいい奉公人であるから、なんとかして引き留めて置きたいと阿母さんもふだんから云つていると、彼女はなんの秘密も知らないように話していた。

自分が世話をした奉公人が評判がいいのは結構であるが、もし津の国屋の内輪うちわにそんな秘密が忍んでいるとすれば、その奉公人を周旋した自分の身の上にどんな係り合いが起らないとも限らな

いと、文字春はそれがためにまた余計な苦勞を増した。併しその後も別に何事もなしに過ぎて、今年ももう師走のはじめになった。底寒い日が幾日もつづいて、時々あられに大きい霰が降った。

「おい、師匠。もう起きたかえ」

師走の四日の朝、もう五ツ（午前八時）を過ぎたころに、大工の兼吉が文字春の家の格子をあけた。

「あら、棟梁。なんぼあたしだって……。もうこのとおり、朝のお稽古を二人も片付けたんですよ。節季せつきしわす師走じやありませんか」

「そんなに早起きをしているなら知っているのかえ。津の国屋の一件を……」

「津の国屋の……。どうしたんです。何かあったんですか」と、

文字春は長火鉢の上へ首を伸ばした。

「とんでもねえことが出来てしまって、ほんとうに驚いたよ」と、兼吉も火鉢の前に坐つて、まず一服すつた。

「おかみさんと番頭さんが土蔵のなかで首をくくつたんだ」

「まあ……」

「全くびつくりするじゃねえか。何ということだ。呆れてしまつた」

兼吉は罵るように云いながら、火鉢の小縁こべりで煙管きせるをぼんぼんと叩くと、文字春の顔の色は灰のようになった。

「どうしたんでしようねえ、心中でしようか」と、彼女は小声で訊いた。

「まあ、そうらしい。別に書置らしいものも見当らねえようだが、男と女が一緒に死んでいりや先ずお定まりの心中だろうよ」

「だって、あんまり年が違うじやありませんか」

「そこが思案のほかとでもいうんだらう。出入り場のことを悪く云いたかねえが、あのおかみさんも一体よくねえからね。いつかも話した通り、お安という貫い娘をむごく追い出したのも、おかみさんが旦那に吹っ込んだに相違ねえ。そんなことがやつぱり崇つているのかも知れねえよ。なにしろ津の国屋は大騒ぎさ。二人も一度に死んでいるんだから、内分にも何にもなることじゃあねえ。取りあえず主人を下谷から呼んでくるやら、御検視を受けるやら、家じゆうは引っくり返るような騒動だ。なんと云つても出

入り場のことだから、おいらも今朝から手伝いに行つてはいるが、娘と奉公人ばかりじゃあどうすることも出来ねえので弱っている」

「そうでしようねえ」

お角の話が今更のように思い合わされて、文字春は深い溜息をついた。

「それで御検視はもう済んだんですか」

「いや、御検視は今来たところだ。そんなところにうろついていると面倒だから、おいらはちよいとはずして来て、御検視の引き揚げた頃に又出かけようと思つているんだ」

「それじゃあ、あたしももう少し後に行きましょう。そんな訳じやあお悔みというのも変だけれど、まんざら知らない顔も出来ま

せんからね」

「そりやあそうさ。まして師匠はあすこの家まで幽霊を案内して来たんだもの」

「いやですよ」と、文字春は泣き声を出した。「後ご生しょうですから、もうそんな話は止して下さいよ。なんの因果で、あたしはこんな係り合いになつたんでしようねえ」

半ほん晌ときあまりも過ぎて、兼吉は再び出ていった。文字春はこわ

ごわながら門かどぐち口へ出て見ると、近所の人達もみな門かどに出てなにか頻りにいろいろの噂をしていた。津の国屋のまえにも大勢の人があつまつて内を覗いていた。きょうも朝から雲つた日で、灰を凍らせたような暗い大空が町の上を低く掩つていた。

「おい、師匠。御近所がちつと騒々しいね」

声をかけられて見返ると、それはここらを縄張りに行っている岡つ引の常吉であつた。桐畑の幸右衛門はこのごろ隠居同様になつて、伴の常吉が専ら御用を勤めている。彼はまだ二十五六の若い男で、こんな稼業には似合わないおとなしやかな色白の、人形のような顔かたちが人の眼について、人形常という^{あだな}綽名をとつていたのであつた。

人に可愛がられない商売でも、男は男、しかも人形の常吉に声をかけられて文字春は思わず顔をうすく染めた。かれは袖口で口を掩いながら^{うぶ}初心らしく挨拶した。

「親分さん。お寒うございます」

「ひどく冷えるね。冷えるのも仕方がねえが、また困ったことが出来たぜ」

「そうですね。もう御検視は済みましたか」

「旦那方は今引き揚げるところだ。就いては師匠、おめえにちつと訊きてえことがあるんだが、後に来るよ」

「はあ、どうぞ、お待ち申しております」

常吉はそのまま津の国屋の方へ行つてしまつた。文字春はあわてて内へはいつて、別の着物を出して着換えた。帯も締めかえた。そうして、長火鉢へたくさんの炭をついだ。かれは津の国屋の一件について、なにかの係り合いになるのを恐れながら、一方には常吉の来るのを迷惑には思つていなかった。

七

「師匠。内かえ」

常吉が文字春の家の格子をくぐったのは、それから一晌とつきほどの後であつた。文字春は待ち兼ねていたように、すぐに長火鉢のまえを起つて出た。

「さきほどは失礼。きたないところですが、どうぞこちらへ……」
「じゃあ、ちつと邪魔をするぜ」

若い岡つ引が草履をぬいで内へあがると、文字春は小女に耳打ちをして、近所の仕出し屋へ走らせた。

「ところで、師匠。早速だが、少しおめえに訊きてえことがある。あの津の国屋の娘はおめえの弟子だというじやあねえか。師匠も津の国屋へときどき出這入りすることもあるんだろう」

「はあ。時々には……」と、文字春はうなずいた。「ですから、きようも後にちよいと顔出しをしようと思つてゐるんです」

「ところで、素人しろとっぽいことを訊くようだが、今度の一件についてなんにも心当りはねえかね。おいらの考えじやあ、おかみさんと番頭の心中はどうも呑み込めねえ。あれには何か込み入ったわけがあるだろうと思うんだが……。おいらは前から知つてゐるが、あの金兵衛という番頭は白鼠で、そんな不埒を働く人間じやあねえ。ましておかみさんとは母子おやこほども年が違つてゐる。たとい一

緒に死んだとしても、心中じやあねえ。何かほかに仔細があるに相違ねえ。今の処じやあ年の若けえ娘と奉公人ばかりで、何を調べても一向に手^て応^てえがねえので困っているんだが、師匠、決しておめえに迷惑はかけねえ。なにか気のついたことがあるんなら教えてくんねえか」

「そうですねえ。親分も御承知でしょう。なんだか津の国屋にいやな噂のあることは……」

「いやな噂……」と、常吉もうなずいた。「なにかあの店が潰れるとかいうんじやねえか」

「そうですねえ。あたしはよく知りませんが、津の国屋にはお安さんとかいう娘の死霊が崇っているとかという噂ですが……」

「娘の死霊……。そりやあおいらも初耳だ。そうして、その娘はどうしたんだ」

相手が乗り気になつて耳を引き立てるので、文字春は自然に釣り出されたのと、もう一つには常吉に手柄をさせてやりたいというような下したころ心をまじつて、彼女はさきに兼吉から聞かされたお安の一件をくわしく話した。まだその上に自分がお祖師様へ参詣の帰り路で、お安の幽霊らしい若い娘と道連れになつたことまで怖々こわこわとささやくと、常吉はいよいよ熱心に耳をかたむけていた。殊に文字春が幽霊のような娘に出逢つたということが彼の興味を惹いたらしかつた。彼はその娘の年ごろや人相や服装みなりなどを一々明細に聞きただして、自分の胸のうちに畳み込んでいるよう

に見えた。

「むむ。こりやあいことを聞かしてくれた。師匠、あらためて礼をいうぜ、そんなことはちつとも知らなかつた」

仕出し屋から誂えの肴を持ち込んで来たので、文字春はすぐに酒の支度をした。

「こりやあ気の毒だな。こんな厄介になつちやあいけねえ」と、常吉はこころから気の毒そうに云つた。

「いいえ、ほんの寒さしのぎにひと口、なんにもございませんけれど、あがつてください」

「じゃあ、折角だから御馳走になろう」

二人は差し向いで飲みはじめた。その間に、文字春は津の国屋

の一件について、自分の知っているだけのことを残らずしやべつてしまった。女中のお角は自分が世話をしたんだということも打ち明けた。これも常吉の注意を惹いたらしく、彼はときどきに猪ち口よこをおいて考えていた。なんだか残り惜しそうに引き留める師匠をふり切つて、彼は半晌ほどの後にここを出た。

「まだ御用がたくさんある。いい心持に酔つちやあいられねえ。また来るよ」

彼は幾らかの金をつつんで、文字春が辞退するのを無理に押しつけるようにして置いて行つた。霰はまだ時々にはらばらと降つていた。常吉はその足で再び津の国屋へ引つ返して、なにかの手伝いをしている大工の兼吉を表へ呼び出して、お安のことをもう

一度訊きただした。それから女中のお角をよび出して、女房と番頭との関係についても一応詮議すると、お角は文字春にも話した通り、たしかに二人が密会しているらしい証跡を見とどけたと云った。しかし自分は新参者で、それにはなんにも関係のないということを繰り返して弁解していた。常吉はそれだけの調べを終つて、更に八丁堀へ顔を出すと、同心たちの意見も心中に一致して、もう詮議の必要を認めないような口ぶりであつた。それでも此の時代に於いては、主人と奉公人との密通は重大事件であるから、なにか新しく聞き込んだことがあつたならば、油断なく更に詮議しろとのことであつた。常吉はお安の幽霊一件を同心らの前ではまだ発表しなかつた。ただ自分には少し腑に落ちないところ

ろがあるから、もう一と足踏み込んで詮議してみたいというだけのことを断わって帰って来た。彼はそれからすぐに神田三河町の半七をたずねて、何かしばらく相談して別れた。

その次の日の午過ぎに津の国屋から女房お藤のとむらい葬式が出た。

しかし番頭と心中したということになっている以上、無論に表面の葬式を営むことも出来ないで、日の暮れるのを待つてこつそりと棺桶をかつぎ出した。近所の者もわざと遠慮して、大抵は見送りに行かなかつた。文字春も津の国屋へ悔みに行つただけで、葬式の供には立たなかつた。大工の兼吉と店の若い者二人と、親類の総代が一人、唯それだけの者が忍びやかに棺のあとについて行つた。内福と評判されている津の国屋のおかみさんの葬式があ

の姿とは、心柄とはいいながらあんまり哀れだと近所の者もささやきあっていた。世間に対して面目ないせいもあるう、主人の次郎兵衛は奥に閉じ籠ったきりで、ほとんど誰にも顔をあわせなかつたが、初七日しよなのかのすむのを待つて再び寺へ帰るとの噂であつた。女房も番頭も同時に世を去つて、あとは若い娘のお雪ひとりである。その上に主人が寺へ歸つてしまつたらば、誰が店を取り締つて行くであろう、と近所では専ら噂していた。文字春も不安でならなかつた。死霊の祟りで津の国屋はとうとう潰れてしまうのかと、彼女はいいよいよおそろしく思った。

そのうちに初七日も過ぎたが、次郎兵衛はやはり津の国屋を立ち退かなかつた。彼はあまりに意外の出来事におどろかさされて、

葬式の出たあくる日から病氣になつて、どつと床に就いているのだと伝えられた。店の方は休みも同様で、二、三人の親類が来て家内の世話しているらしかった。

津の国屋の初七日が過ぎて三日の夜であつた。文字春は芝のおなじ稼業の家に不幸があつて、その悔みに行つた帰り途に、溜池ふちの縁へさしかつたのはもう五ツ（午後八時）を過ぎた頃であつた。津の国屋といい、今夜といい、とかくに忌なことばかり続いたので、文字春もいよいよ暗い心持になつた。早く帰るつもりであつたのが思ひのほかには時を費したので、暗い寂しい溜池のふちを通るのが薄気味が悪かつた。今日こんにちと違つて、山王山の麓をめぐる大きい溜池には河かわ獺わそが棲むという噂もあつた。幽霊の娘と道

連れになったことなどを思い出して、文字春はぞつとした。月のない、霜ぐもりとでも云いそうな空で、池の枯蘆かれあしのなかでは雁の鳴く声が寒そうにきこえた。文字春は両袖をしっかりとかきあわせて、自分の下駄の音にもおびやかされながら、小股に急いで来ると、暗い中から駈けて来た者があつた。

避ける間もなしに両方が突き当たつたので、文字春はぎよつとして立ちすくむと、相手はあわただしく声をかけた。

「早く来てください。大変です」

それは若い女、しかも津の国屋のお雪の声らしいので、文字春はまた驚かされた。

「あの、お雪さんじゃありませんか」

「あら、お師匠さん。いいところへ……。早く来てください」

「一体どうしたの」と、文字春は胸を躍らせながら訊いた。

「店の長太郎と勇吉が……」

「長どんと勇どんが……。どうかしたんですか」

「出刃庖丁で……」

「まあ、喧嘩でもしたんですか」

暗い中でよく判らないが、お雪はふるえて息をはずませているらしく、もう碌々に返事もしないで、師匠の足もとにべったりと坐ってしまった。

「しっかりおしなさいよ」と、文字春は彼女を抱き起しながら云った。「そうして、その二人はどこにいるんです」

「なんでもそこらに……」

なにしろ暗いので、文字春にはちつとも見当が付かなかった。水明かりでそこらを透かしてみたが、近いところでは二人の間があらそつている様子も見えなかつた。仕方がなしに彼女は声をあげて呼んだ。

「もし、長さん、勇さん……。そこらにいますか。長さん……。勇さん……」

どこからも返事の声はきこえなかつた。暗さは暗し、不安はいよいよ募つてくるので、文字春はお雪の手を引いて、明るい灯の見える方角へ一生懸命にかけ出した。

八

半分は夢中で自分の家のまえまで駈けて来て、文字春は初めてほつと息をついた。よく見ると、お雪も真つ蒼になって、今にも再び倒れそうにも思われたので、ともかくも家の中へ連れ込んで、ありあわせの薬や水を飲ませた。すこし落ち着くのを待つて今夜の出来事を聞きただすと、それは又意外のことであつた。

今夜お雪が店先へ出ると、あとから若い者の長太郎がついて来て、少し話があるから表までちよいと出てくれというので、な心なく一緒に出ると、長太郎は突然に短刀を抜いて彼女の眼の先に突きつけた。そうして、そこまで黙つて一緒に来いとおどした。

相手が鋭い刃物を持っているのにおびやかされて、お雪は声を立てることが出来なかった。両隣りにも人家がありながら、声を立てたら命がないとおどされているので、彼女は身をすくめたまま溜池のふちまで連れて行かれた。

長太郎はあたりに往来のないのを見て、自分の女房になつてくれとお雪に迫つた。おどろいて返答に躊躇していると、長太郎はいよいよ迫つて、もし自分の云うことを肯かなければ、おまえを殺してこの池へ投げ込んで、自分もあとから身を投げて、世間へは心中と吹ふいちよう聴きさせると云つた。お雪はいよいよおびえて、しきりに堪忍してくれと頼んだが、長太郎はどうしても肯かなかつた。お雪はもう切羽せつぱつまったところへ、小僧の勇吉があとから駈

けて来て、これも出刃庖丁を振りかざして、やにわに長太郎に斬つてかかった。二人は短刀と出刃庖丁とで闘つた。お雪は途方にくれて、誰かの救いを呼ぼうとして夢中で駆け出したが、もう気が転倒しているので反対の方角へ足を向けたらしく、あたかもこつちへ歸つて来る文字春に突き当たつたのであつた。

そう判つて見ると、いよいよ捨てては置かれないので、文字春はすぐに津の国屋へ知らせに行つた。店でもその報告に驚かされたらしく、若い者二人と小僧二人とが提灯を持って其の場へ駆け付けると、果たして長太郎と勇吉とが血だらけになつて枯蘆の中に倒れているのを発見した。どつちも二、三カ所の浅手を負つた後に、刃物を捨てて組討ちになつたらしく、二人は堅く引つ組ん

だままで池の中へころげ落ちていた。刃物の傷はみな浅手で命にかかわるようなことはなかったが、池へころげ落ちた時に、長太郎は運悪く泥深いところへ顔を突っ込んだので、そのまま息が止まってしまった。勇吉は半死半生の体であつたが、これは手当ての後に正気にかえつた。

お雪を無事に送りとどけて貰つたので、津の国屋では文字春にあつく礼を云つた。しかし津の国屋よりもほかに礼を云つてもらいたい人があるので、文字春はさらに桐畑の常吉の家へと報らせに行つた。

「どうせ一人死んだことですから、そちらの耳へも無論はいりませうが、なるべく早い方がいいかと思ひまして……」

「いや、それはありがてえ」と、ちようど居合わせた常吉がすぐに出て来た。「よく知らせてくれた。じゃあ、これから出かけるでしょう。これでこの一件もたいがい眼鼻が付いたようだ。師匠、今にお礼をするよ」

思い通りに礼を云われて、文字春は満足して帰った。かれはもう死霊の怖いことなどは忘れていた。ちつとぐらい祟られてもいから、自分も立ち入ってこの事件のために働いて見たいような気にもなった。

常吉はすぐに津の国屋へ行ってみると、勇吉の傷は右の手に二カ所と、左の肩に一カ所であったが、どれも手重いものではなかった。それでもよほど弱っているらしいのを常吉はいたわりなが

ら、町内の自身番へ連れて行つた。

「おい、小僧。おめえはえれえことをやったな。命がけで主人の娘の難儀を救つたんだ。お上から御褒美が出るかも知れねえぞ。しかしおめえはどうして刃物を持って長太郎のあとから追っかけて行つたんだ。あいつが娘を連れ出すところを見ていたのか」

弱つてはいたが、勇吉は案外はつきりと答えた。

「はい、見ていました。長太郎が刃物でお雪さんをおどかして、無理にどこへか連れて行こうとするのを見ましたから、空手からてじゃあいけないと思つて、すぐに台所から出刃庖丁を持ち出して行きました。そうして溜池のところで追つ付いたんです」

「よし、判つた。だが、まだ一つ判らねえことがある。おめえは

それを見つけたら、なぜほかの者に知らせねえ。自分一人で刃物を持ち出して行くというのはおかしいじゃねえか」

勇吉は黙っていた。

「ここが大事のところだ」と、常吉は諭さとすように云った。「おめえが褒美を貰うか、下手人げしゆにんになるか、二つに一つの大事のところだ、よく落ち着いて返事をしろ」

勇吉はやはり黙っていた。

「じゃあ、おれの方から云うが、おめえは何か長太郎を怨んでいな。娘を助ける料簡も無論だが、まだ其のほかに、いつそここで長太郎をやっつけてしまおうという料簡がありやあしなかつたか、どうだ。はつきり云え」

「恐れ入りました」と、勇吉は素直に手をついた。

「むむ、そうか」と、常吉はうなずいた。「よく素直に申し立てた。そこで、なぜ長太郎をやつつける気になった。長太郎になにか遺恨でもあるのか」

「どうも仇かたきのように思われてなりませんので……」

「かたき……。むむ、おめえは津の国屋の番頭の親類だということだな」

「はい。金兵衛の縁で津の国屋へ奉公にまいりました」

「その金兵衛の仇……。長太郎が金兵衛を殺したのか」と、常吉は念を押した。

「どうもそう思われてなりません」と、勇吉は眼をふいた。

それには何か証拠があるかと常吉が押し返してきくと、勇吉は別に確かな証拠はないと云った。併しどうもそう思われてならない。金兵衛は自分の親類であるが、決して主人と不義密通を働くような人間ではない。かれの死骸を土蔵の中で発見した時から、これは自分で首をくくったのではない、誰かが彼を絞め殺してその死骸を土蔵の中へ運び込んだのに相違ないと判断したが、何分にも確かな証拠がないので、自分はよんどころなしに今まで黙っていたのであると、勇吉は申し立てた。それにしても、数ある奉公人の中でどうして長太郎一人を下手人と疑ったのかと、常吉はかさねて詮議すると、その前日の午^{ひる}すぎに長太郎が主人の娘に向つて何か冗談を云った。それがあまりにしつこい^{みだ}のと猥^{みだ}りがまし

いので、帳場にいた金兵衛が聞き兼ねて、大きい声で長太郎を叱り付けた。叱られた長太郎はさすが起つて行つたが、その時に彼は怖い眼をして金兵衛をじろりと睨んだ。その鋭い眼つきが今でも自分の眼に残っていると勇吉は云つた。

併しそれだけのことでは表向きの証拠にならないので、勇吉は口惜しいのを我慢していると、今夜の事件が測らずも出しゅつ来たいした。憎らしい長太郎が主人の娘を脅迫して、どこへか連れて行くこととするのである。今年十六の勇吉はもう堪忍ができなくなつて、いつそ彼を殺してお雪を救おうと、咄嗟とつさのあいだに思案を決めたのであつた。

「よし、よし、よく申し立てた」と、常吉は満足したようにうな

ずいた。「傷養生をして後日ごにちの御沙汰を待っている。かならず短気を出しちやあならねえぞ。金兵衛の仇はまだほかにも大勢ある。それは俺がみんな仇討ちをしてやるから、おとなしく待っている」
「ありがとうございます」と、勇吉は再び眼を拭いた。

勇吉をいたわって、あとから津の国屋へ送ってやるようにと町役人に云いつけておいて、常吉はすぐに津の国屋へ引返して行く。こうとして、文字春の家の前を通りかかると、家の中では何かけたたましいの叫び声みずくちがきこえた。それが耳について思わず立ちどまる途端に、水口みずくちの戸を押し倒すような物音がして、ひとりの女が露路の中から転がるように駈け出して来た。つづいて又一人の女が何か刃物をふり上げて追って来るらしかった。常吉は飛

んで行つて、あとの女の前に立ちふさがると、女は夜叉やしやのようになつて彼に斬つてかかった。二、三度やりたがわして其の刃物をたたき落して、常吉は叫んだ。

「お角、御用だ」

御用の声を聞くと、女は掴まれた腕を一生懸命に振りはなして、もとの露路の奥へ引つ返して駈け込んだ。常吉はつづいて追つてゆくと、逃げ場を失つたものか但しは初めから覚悟の上か、かれはそこにある井戸側に手をかけたと思うと、身をひるがえして真つ逆さかさまに飛び込んだ。

長屋じゆうの手を借りて常吉はすぐに井戸の中から女を引き揚げさせたが、かれはもう息が絶えていた。それが文字春の世話で

津の国屋へ奉公に行つたお角であることは、常吉も初めから知つていた。文字春の話によると、たつた今その水口の戸をそつとたたいて師匠に逢いたいという者がある。この夜更けに誰か知らんと思ひながら、文字春は寝衣ねまきのまま出て見ると、それはかのお角で、お前が余計なおしやべりをしたもんだから何もかもばれてしまつたと云ひながら、隠していた剃かみそり刀でいきなりに斬つてかかつたので、文字春はおどろいて表へ逃げ出したというのであつた。

「大方そんなことだろうと思つた。だが、まあ、怪我がなくてよかつた」と、常吉は云つた。

女房と番頭と二人の死人を出した津の国屋では、それから十日

も経たないうちに、又もや長太郎とお角と二人の死人を出した。しかし、これで丁度差し引きが付いたのであるということが後に判った。

九

津の国屋のお藤を絞め殺したのは、女中のお角であつた。金兵衛を絞め殺したのは、勇吉の想像の通りに若い者の長太郎であつた。かれらは女房と番頭が熟睡しているところを絞め殺して、二つの死骸をそつと土蔵の中へ運び込んで、あたかも二人が自分で縊れ死んだようによそおつたのであつた。

津の国屋の親戚で、下谷に店を持つている池田屋十右衛門、浅草に店を持つている大榎屋弥平次、無宿のならず者熊吉と源助、矢場女お兼、以上の五人は神田の半七と桐畑の常吉の手であげられた。津の国屋の菩提寺の住職と無宿の托鉢僧とは寺社方の手に捕えられた。これでこの一件は落らくぢやく着ちやくした。

これまで書けば、もう改めてくわしく註するまでもあるまい。

池田屋十右衛門と大榎屋弥平次と菩提寺の住職と、この三人が共謀して、かねて内福の聞えのある津の国屋の身代を横領しようと巧んだのであった。津の国屋の主人次郎兵衛は貰い娘このお安をむごたらしく追い出して、とうとう変死をさせたことを内心ひそかに悔んでいた。殊に惣領娘のお清があたかもお安と同一年で死ん

だので、彼はいよいよそれを気に病んで、おりおりには菩提寺の住職に向つて懺悔話をすることもあつた。それが彼等三人に悪計を思い立たせる根源で、坊主が一人加わつてゐるだけに、かれらはお安の死霊を種にして津の国屋の一家をおびやかそうと企てた。

今日から考えると、頗る廻り遠い手段のようではあるが、その時代の彼等としては余ほど巧妙な手段をめぐらそうとしたのかも知れない。かれらはまず死霊の崇りということを云い触らさせて、津の国屋一家に恐れを懐かせ、さらに菩提寺の住職から次郎兵衛をおどして、てい体よく隠居させて自分の寺内へ押し込めてしまつつもりであつた。そうすれば、いやでも娘のお雪に婿を取らなければならぬ。その婿には池田屋十右衛門の次男を押し付けるとい

う段取りで、だんだんにその計略を進行させることになった。しかし堅気の商人あきんど人や寺の坊主ばかりでは、万事が不便であるので、かれらは浅草下谷をごろ付きあるいている無宿者の熊吉と源助とを味方に抱き込んだ。

お安の幽霊に化けたのは、浅草のお兼という矢場女で、見かけは十七八の初心うぶな小娘らしいが、実はもう二十を二つも越しているという莫蓮者ばくれんもので、熊吉の世話でこれもこの一件の徒党に加わったのであった。熊吉と源助は津の国屋の近所を徘徊して、絶えずその様子をうかがっているうちに、お雪の師匠の文字春が堀の内へ参詣に行つて、その帰り路はきつと日が暮れるのを見込んで、撫子の浴衣をきたお兼を途中に待ち受けさせて、怪談がかったお

芝居を演じさせたのであつた。しかし文字春が迂濶うかつにそれを世間に吹聴しないらしいので、かれらは的あてがはずれた。今度は手をかえて、怪しい托鉢僧を津の国屋の前に立たせた。お兼は女中たちの湯帰りをおどした。

それでどうかこうにか次郎兵衛だけはこつちへ人質ひとじちに取つてしまつたが、女房と番頭とが案外にしつかりしていて、かれらの目的も容易に成就しそうもないので、かれらは少し焦じれ出して更に残酷な手段をめぐらすことになつた。お兼は叔母のお角を津の国屋へ住み込ませて、隙を見て女房と番頭とを亡き者にしようと思ひしたが、さすがにお角一人では荷が重いので、店の若い者の長太郎を味方に引き込もうとした。長太郎はふだんから主人の娘

のお雪に思いをかけているので、これが首尾よく成就すればかならずお雪と添わせてやるという条件で、とうとう悪人の仲間に入れてしまった。そうして女房と番頭とが不義を働いているらしいということをお角の口から前以って吹聴させて置いて、よい頃を見測らつて二人の悪人が予定の計画通りに女房と番頭とを亡ほろぼした。しかもそれを巧みに心中と見せかけて世間を欺き、あわせて検視の役人の眼を晦くらました。

これまでは先ず彼等の思いのままに進行したが、その秘密を桐畑の常吉に嗅ぎ付けられたらしいのが、彼等におびただしい不安をあたえた。常吉は文字春から委くわしい話を聴いて、半七と相談の上で先ずその幽霊の身許詮議に取りかかった時に、半七がふと思

い付いたのは彼かのお兼のことであつた。お兼はいつまでも初心うぶらしく見えるのを種として、これまでに小娘に化けて万引や騙りを働いた兇状がある。もしや彼女ではあるまいか眼串を刺して、子の者に云い付けてひそかに彼女が此の頃の様子を探らせると、お兼は先頃浅草の小料理屋へ行つて池田屋十右衛門に逢つたことが判つた。池田屋は津の国屋の親類である。もう一つには、かの熊吉が大榭屋へ忍んで行つて、ときどきに博奕もとでの資本を借り出して来るらしいことが、彼の仲間の口から洩れた。大榭屋も津の国屋の親類である。それから疑いはいよいよ深くなつて、半七は遠慮なしに熊吉を引き揚げてしまった。しかし彼もなかなかの強情者で、容易にその秘密を白状しなかつた。

たとい白状しても、白状しないでも、徒党の一人が引き揚げられたと聞いて、かれらは俄かにうろたえ始めた。源助はあわてて何処へか姿をかくした。それが津の国屋の方へもきこえたので、お角も長太郎もぎよつとした。お角は文字春の家の小女をだまして、師匠の口から常吉にいろいろのことを訴えられたらしいことを探り知ったが、大胆な彼女はわざと平気で澄ましていた。しかし年の若い長太郎はなかなか落ち着いていられなかった。彼は破れかぶれの度胸を据えて、いつそお雪を脅迫して何処へか誘拐して行こうと企てたが、それを勇吉に妨げられて、自分は溜池の泥水を飲んで死んだ。

こうなると、お角もさすがに平気ではいられなくなった。その

まますぐに姿を隠してしまえば、或いはもう少し生き延びられたかも知れなかったが、こうした女の習いとして彼女は文字春をひどく憎んだ。何をしゃべったか知らないが、男のいい岡っ引を引つ張り込んで、酒を飲ませてふざけながら、自分たちの秘密を洩らしたかと思うと、お角はむやみに文字春が憎らしくなって、行きがけの駄賃に殺すつもりか、それとも顔にでも傷をつけるつもりか、ともかくも彼女の家へ押掛けて行ったのが運の尽きで、お角はわが身を井戸へ沈めることとなったのである。勿論、死人に口なしで、お角がほんとうの料簡はよく判らない。事情の成行きで唯こう想像するだけのことであった。

徒党の者はすべてその罪状を白状した。源助は一旦その姿を晦くら

ましたが、千住の友達へ立ち廻ったところを捕えられた。主犯者の池田屋と大榎屋は死罪、菩提寺の住職とお兼は遠島、その他の者は重追放を申し渡された。

これでこの怪談は終つたが、ついでに付け加えて置きたいのは、その明くる年に桐畑と津の国屋とに二組の縁談の纏まとまったことであつた。一方は常吉と文字春とで、一方は勇吉とお雪であつた。常吉は二十六で、文字春は二十七であつた。勇吉は十七で、お雪は十八であつた。もつとも、津の国屋の方は約束だけで、ほんとうの祝言はもう一年繰り延べることとなつたが、二組ともに一つずつの年上の嫁を持つというのは、そこに何かの因縁があつたのかも知れないと、大工の兼吉は仔細ありそうに話していた。

「どうです。かなり入り組んでいるでしょう」と、半七老人は笑いながら云った。「くどくもいう通り、随分廻り遠い計略で、今日の人達から考えると、あんまり馬鹿々々しいように思われるかも知れませんが、第一には何といつても昔の人間は気が長い。もう一つには金儲けということがなかなかむずかしかつたからですね。津の国屋——津国屋と書くのがほんとうだそうです。暖簾にはやはり津の国屋と、のの字を入れてありました。読みいいめでしよう——は何でも地所家作を合わせて二、三千両の身代だったそうです。その頃の二、三千両と云えばこの頃の十万円ぐらいに当るでしょうから、それだけのものをただ取るには並大抵の

ことではむずかしい。大勢の人間が知恵をしぼって、暇をつぶしても二、三千両の身代を乗っ取れば、まず大出来だったんでしようよ。今日のようにボロ会社を押し立てて新聞へ大きな広告をして、ぬれ手で何十万円を掻き込むなんていう、そんな器用な芸当をむかしの人間は知りませんからね。十万円の金を儲けるにも、これほど手数料がかかった芝居をしたんです。それを思うと、むかしの悪党は今の善人よりも馬鹿正直だったかも知れませんね。あはははははは」

これもやはりほんとうの怪談ではなかった。わたしは何だか一杯食わされたような心持で、老人の笑い顔をうつかりと眺めていた。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

※「文字春はよいよい」を「文字春はいよいよ」に改めるにあたっては、「半七捕物帳 第二輯」新作家、1923（大正12）年7月20日発行、「定本 半七捕物帳 第二巻」早川書房、1956（昭和31）年1月25日発行、「半七捕物帳（1）」青蛙房、1966（昭和41）年3月20日発行を参照しました。

入力・tat_suki

校正・たつき

1999年8月2日公開

2007年11月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

津の国屋

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>